

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：82646

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K13611

研究課題名（和文）日本の宗教系大学における宗教文化の組織への組み込みと普及に関する組織社会学的研究

研究課題名（英文）An Organizational Sociological Study of the Incorporation and Diffusion of Religious Culture into Organizations of Japanese Religious Universities

研究代表者

齋藤 崇徳（Saito, Takanori）

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構・研究開発部・助教

研究者番号：80781541

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の宗教系大学において宗教に関連する文化的制度が、公式組織構造に組み込まれたことを明らかにした。第一に、宗教に関連する儀礼、教会等の建造物、公式組織に埋め込まれた活動の存在を明らかにした。第二に、戦後日本においては、礼拝に反対する論理が形成され、儀礼としての礼拝は一つの争点になってきたことを明らかにした。第三に、物質性を持つ大学キャンパスやその建造物は、大学のアイデンティティ、正当性、制度プロセス、葛藤を生み出してきた歴史を示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第一に、組織の公式組織には宗教文化が根付いていることを実証することにより、現代日本の宗教系大学が十分に「宗教的」であることの証左を示したと同時に、宗教系大学の「宗教」について議論する際に取り得る方法論を提示した。第二に、高等教育研究においてその組織を議論する際に文化の要素を無視することは、分析として不十分なものになり得ることを示した。すなわち、今日、「实际的」な主題として議論されているガバナンスやマネジメント、学校法人制度などにおいても文化が確かに関わっている。より本質的に高等教育制度に存在する文化について検討することを通じて「实际的」な主題のさらなる検討が可能なのではないかと思われる。

研究成果の概要（英文）：This study reveals that cultural institutions related to religion were embedded in the formal organizational structure at Japanese religious universities. First, it articulated the existence of religion-related rituals, churches and other structures, and religious activities embedded in official organizations. Second, it revealed that in postwar Japan, the logic of opposition to worship has been formed, and worship as a ritual has become one point of contention. Third, it was shown that university campuses and their buildings, with their materiality, have created university identity, legitimacy, institutional processes, and conflicts.

研究分野：高等教育研究

キーワード：宗教系大学 組織社会学

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の背景

一般に現代日本の宗教系大学において「宗教」という要素は重要視されていないように思われる。宗教は大学の対外的なアピールやその歴史的な由来において言及されることはあっても、宗教系大学自身はもちろん、その外部のアクター一般からも、積極的な意義を持って主張されることは少ない。これには大学の実態と研究状況のそれぞれに原因があると思われる。

実態に関する原因とは、争点になりやすい経済的・政治的要素とは異なり、宗教を含む「文化」という主題が大学の中心的な諸問題とは強い関係がないと考えられていることを指す。とくに現今の議論の対象になっている、大学の経営や政策、および教育内容や方法の改革といった「実際」な主題は、一般に「文化」とはあまり関係ないとされている。

「文化」が重要視されていない、もう一つの根本的な原因は、とくに高等教育研究における「文化」が、何を意味し、何を明らかにするための概念なのか曖昧であることにある。個々の具体的な「文化」とされる現象についての研究は数多いが、それがどのような位置づけの概念であり、また、それを研究することによって何が明らかになるかは必ずしも明確ではない状況にある。

しかしながら、本研究では、宗教系大学を組織社会学の視点で分析することによりこのような状況を克服し、大学と文化の関係についての新たな視座を得ることができると考える。

このようなアプローチを設定する理由は第一に、大学は政治・経済的条件によってのみ規定される組織ではなく、当該社会の教育や学術などの「文化」のあり方が実質的な条件として強く関わる文化的な組織であり、その「文化」は組織の公式構造に組み込まれているものとして考えることができるからである。すなわち、宗教系大学は、宗教という「文化」を公式の規則や部局、建造物、入学式や公式の行事、カリキュラム等に組み込んでいるため、大学組織と「文化」の関係が明瞭に表れている対象であると言える。

そして第二の理由は、組織社会学においては、組織の外部に存在する制度的環境における文化が組織を強く規定すると考えられてきたからである。さらに、社会生活に安定性と意味をもたらすものとしての制度における文化（文化的制度）は、大学の組織フィールドによって諸大学に普及していくと考えられる（マイヤーほか 2007=2015）。つまり、単一の大学内における文化は、より広い文化的制度によって規定され広まってきたものである。このような視座から、明治期から現代に至るまで、大きな文化的変動を経験してきた宗教系大学を分析することによって、社会に存在する宗教という文化的制度が何を媒介にしてどのように個々の大学に影響を与えているかのメカニズムが明確になり、制度的な普及を通じた変容を明らかにすることができる。

(2) 本研究の意義

本研究の意義は、第一に、大学組織の公式構造に文化的制度がどのように組み込まれているかを明らかにする点にある。すなわち、これまでの教員文化や学生文化の研究のように成員に文化が共有されている事態に着目するのではなく、規則、部局、公式な目標など、その組織の公式構造に実質的に組み込まれているものとして文化を捉えることで、大学組織への新たな視座を得る。

そして第二に、「媒介物」と「運び手 (carrier)」、および「普及」という概念により、文化を静態的なものではなく歴史的・動態的なものとして捉え、そして単一の組織を超えた文化を通じた大学間やその外部環境との関係について明らかにする。これにより、これまでの研究において看過されてきた、宗教のような広く社会的に存在する文化と個別の大学の関係の具体的なメカニズムを明らかにすることができる。と考える。

制度の普及を媒介する「運び手」として Scott (2014) は「象徴のシステム」、社会的地位に基づく相互関係である「関係のシステム」、組織における「反復的活動 (repetitive activities)」、物理的な「人工物 (artifacts)」の4つを挙げているが、本研究ではこれらの対象を実証的に分析することを通じて、文化が普及するメカニズムの一端を示す。

このような視点により、文化を研究することが大学組織を理解する上で重要であることを示すとともに、現今の大学組織改革と無関係ではないことを示す。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本の宗教系大学において宗教に関連する文化的制度がどのように組織に組み込まれており、どう普及してきたかを明らかにすることを通じて、大学組織との文化との関係についての理論を発展させることである。

3. 研究の方法

本研究では、まず、大学における宗教文化の基礎的な分析結果を示す。宗教系大学における宗

教文化に関わるものについては國學院大學日本文化研究所編（1993）による宗教的行事と宗教関係科目の調査があるが、すでに古くなっており、また、人工物を捉えていない。これを補完しアップデートすることが基本的な事実を知るうえで必要である。また、日本に存在するキリスト教系、仏教系、新宗教系、神道系の大学を対象とすることにより、各宗教における特質、日本全体の宗教文化の布置構造について分析し、大学組織と文化の関係の多様性を把握する。上述したように Scott（2014）は、制度の普及を媒介するものとして4つの要素を挙げていた。このうち、入学式や卒業式、各種行事などの「象徴のシステム」、大学内教会など宗教的な「人工物」、大学において公式に行われる、宗教に関わる「反復的活動」に着目する。

次に、キリスト教系の大学に着目した歴史的ケース・スタディの結果を示す。本研究の主題の歴史的な契機には、戦前期、戦時期から戦後期、そして大学紛争期がある。明治維新以後、各宗教団体がその活動の一環として学校を作っていく、宗教的文化を学校に反映させてきた。そして、戦時期の総力戦体制に大学・専門学校のみならず各宗教団体も組み込まれ、そして戦後は自由化したことで、その文化は大きく変容した。最後に、大学紛争期においては、大学への根底的な批判が行われるなかで、宗教と大学とが結びついていることが批判され、多くの宗教文化が退潮したとされる。本研究では、戦前期と比較して研究が行われてこなかった後二者の時期について集中的に検討することで、ひいては現代の宗教系大学に至る宗教文化のあり方を明らかにする。とくに、「象徴のシステム」としての礼拝について、および「人工物」としてのキャンパスについて、それぞれ分析することによって、「文化」がどのように大学組織に組み込まれてきたのかを明らかにする。

4. 研究成果

(1) 得られた成果①：現代日本の大学における宗教文化の基礎的データ

まず、現代日本の大学組織における宗教文化についての基礎的データを概観し検討した。

近年の大学は、高度に組織化され、そしてその組織構造は普遍化しつつあるとされている。すなわち、大学は公式的な（formal）ガバナンスを構築しなければならず、そして、組織構造を国レベルあるいはグローバルなレベルで類似させるという社会的な潮流が存在する。このような社会的環境の下で大学のなかの宗教文化はどのような状態になっているのだろうか。すなわち、教師と学生による小規模な学問的・精神的・文化的共同体という以前の理想とは異なり、高度に組織化された大学と宗教文化の現代的な関連はどのようなものなのだろうか。

上述したように、この問題について検討するための基本的なデータは作成されていないと思われる。個々の大学、あるいは個々の宗教の状況についての研究は多数存在するが（e.g. 江島ほか編 2014, 四国学院大学キリスト教教育研究所編 2005）、それらは組織というよりも宗教問題や創設者の思想に焦点化しており、単一の大学や単一の宗教を超えて検討しておらず、日本全体の状況が不明である。そのなかで國學院大學日本文化研究所編（1993）による宗教的行事と宗教関係科目の調査は包括的なものであり、貴重な資料であるが、現在では古くなり、また、大学における宗教文化を捉える上では不足している側面がある。

そこで現代日本の宗教系大学を対象として、教職員や学生の意識や大学の理念ではなく、宗教文化がどのように大学組織に制度化しているのかを分析した。これを分析することが、上述した問題を考える上での基礎的なデータになると考えるからである。

具体的には、組織論的の制度主義の議論に基づき、宗教文化を大学組織に制度化させる「運び手（carrier）」を分析した。それは宗教文化が、どのように大学組織に根付かせ、制度化させる媒介となるものである。ここでは、象徴のシステムとして宗教に関する儀礼を、人工物として宗教に関する建造物を、反復的活動として宗教に関する公式構造（formal structure）を分析した。入学式や卒業式、各種行事などの儀礼は大学における様々な象徴を示す「象徴のシステム」である。また、大学内教会などの建造物は、宗教的な「人工物」である。また、宗教を担当する組織（宗教部など）が公式に設置されており、役割を担わされているとすれば、それは大学における組織的なルーチン活動として宗教文化が組み込まれていることを意味するため、「反復的活動」と言える。

具体的には、公益財団法人国際宗教研究所宗教情報リサーチセンターの「宗教系学校リンク集」のうち、「区分」を「大学」（短期大学を含んでいる）とする学校199校（2021年8月現在）を対象とした。ただし、2021年8月現在閉校している学校4校 および学校法人が変わった学校1校を除いている。このリストには、「宗教別」、「個別宗教」、「教団名」、「所在地」の変数が含まれているが、本章ではこれに加えて「短期大学」の変数も含めて分析した。

分析の結果、ほとんどすべての宗教系大学において、何らかの宗教文化の「運び手」が存在していることが明らかとなった。

まず、儀礼については、宗教にかかわらず多くの学校において実施していたことが明らかになった。大学についてその「世俗化」が議論されて久しいが（Roberts and Turner 2000, 古屋 1993, Marsden and Longfield eds. 1992）、宗教系大学は儀礼を組織に多様なたちで組み込んでいけると言える。

建造物については、キリスト教系において顕著に多かった。これは今回の調査方法として宗教的だとわかりやすい建物等がキリスト教系においては多かったということだとも言える。実際には、様々な宗教的な「人工物」が他の宗教系においても存在することは推測される。

最後に公式構造については、教育機能、研究機能、また、儀礼の機能など、様々なタイプがあった。今日の大学の公式構造が高度に組織化しているなかで、そのなかに宗教的なものを組み込んでいると言える。ただし、その構造が教学組織のものなのか、事務組織のものなのかにより、組織上の位置づけは異なるだろう。なお、短期大学において公式構造を設けていない学校が多いのは、その規模や資源、短期大学としての方針に依存するものだと推測される。

結論として、多くの宗教系大学には宗教文化を制度化する「運び手」が存在することがわかった。それらは現代大学の組織自体に根付いていると言える。現代日本において大学の宗教性を問う際には、その「精神」や「理念」の上で問題とされることが多い。とくに、大学制度において重要な自己点検および評価の結果や認証評価機関による評価ではそのような文言がよく見られる。しかしながら、「運び手」に着目することによって、「精神」や「理念」ではない、かつ、実際の公式組織に関連した宗教文化の側面が明らかになると考えられる。

(2) 得られた成果②：キリスト教系大学における礼拝

戦後期のキリスト教系学校において実施されてきた「象徴のシステム」としての「礼拝」に着目した分析を行った。実は学校内における「礼拝」は教会における礼拝とは異なる意味づけが行われてきており、そしてそのために独自の葛藤の歴史が存在した。ゆえに宗教文化が大学内に普及する際に起こる現象の重要な事例の一つとして位置づけられる。

欧米のキャンパスライフの議論においては、宗教はしばしば主題となってきた。なぜなら、キャンパスにおいて宗教間、とくにキリスト教とその他の宗教との間での葛藤や、大学と（キリスト教ではない）宗教との葛藤が観察されてきたからである。しかし、実際に戦後日本の大学史にそのような葛藤が無かったかというそうではない。それはキリスト教系大学における礼拝に着目することで見出すことができる。戦後から大学紛争期を通じた拡大期でのキリスト教系大学にとって礼拝は重要な主題の一つであった。すなわち、学生数が増加すると、日本社会全体のキリスト教徒の人口比から自然に、学生の内部でもキリスト教に関心の薄い学生が増加していく。それに伴い礼拝というキリスト教において根幹となる儀礼あるいは教育プログラムをいかに行うかということが学校側に課題として意識されるようになり、学生の礼拝の受けとめ方も変化していったのである。大学紛争では礼拝が明確に批判されキリスト教系大学という場の宗教性が大きく変容した。

まず現代の主にプロテスタントの実践神学における学校礼拝論を確認することで、神学において学校礼拝が一つの争点になってきたことを提示するとともに、学校礼拝が「宗教と世俗」という主題においてどのような問題になり得るのかという本稿における枠組みを検討した。

次に戦後の大学において礼拝がどう捉えられてきたのかを史料を用いて分析した。具体的には大学紛争期までは主に青山学院女子短期大学の史料を中心に、大学紛争期は各校史を用いて議論した。分析の結果、次のような知見が得られた。戦後、学生にとっての世俗教育への要求と「宗教」との整合性が必ずしも達成されなくなり、学生の宗教的傾向に基づく「サボタージュ」などが起こる状況となり、徐々に葛藤が顕在化していった。さらに大学紛争により大学という制度自体が問われたとき、礼拝という実質的な時間も空間も必要とする「実践」は変化し、学校礼拝論において礼拝を「宗教」化する方向性とその状況に応じてあくまで大学による「教育」として考える方向性が生まれるなど、異なる意味づけを持つことが要求されることになった。それは大学の拡大にともなう非キリスト者の学生の増加と礼拝に反対する論理の形成、そして大学紛争期における大学批判とキリスト教批判の結合などによるものであった。

(3) 得られた成果③：戦後のキリスト教系大学におけるキャンパスの社会的意味

戦後日本において大学キャンパスにどのような社会的意味が付与されてきたのかを、理論研究およびキリスト教系大学の事例から明らかにした。

新型コロナウイルス感染症の拡大は、物理的なキャンパスが存在することの意味を問い直した。この「意味」を理論的に再考するためには、単なる空間や建造物などのモノそのものだけではない、社会制度のなかでの物理的なキャンパスの特性を明らかにする必要がある。この目的の設定は、キャンパスの建築史（宮本 1989）においてはあまり言及されない、社会的な意味を重視するものである。同時に、学生生活（「キャンパスライフ」）や、大学と都市の歴史、あるいはとくに私学についてしばしば言及されるキャンパス土地取得の歴史ではない主題として位置づけられる。

具体的には、戦後日本の宗教系大学において物理的なキャンパス、なかでも建造物や人工物がどのようなキリスト教的な「意味」を持ってきたかを検討した。宗教系大学は、後述するように宗教制度という大学制度外の要素が影響するがゆえに、「聖」と「俗」とが交わる点にある事例であり、この主題を議論するにあたり適当な対象であると考えられる。

なかでも、組織論的新制度主義の議論を参照しながら、次の三つの議論を行った。第一に、物理的な大学キャンパスをどのように捉えるかという理論的な視座について、組織論的新制度主義における物質の議論から確認した。第二に、宗教学の知見も確認しながら、大学における宗教的な物質をどのように捉えるかを物質宗教についての研究から検討した。第三に、大学の事例の分析を行った。とくにアイデンティティ、正当性、制度プロセス、葛藤に着目した分析を通じて、宗教系大学における、ジョーンズらのレビューが挙げた制度と物質の関わり、すなわち、制度の基礎と表現、正当化を示すもの、行為の文化的規則である制度ロジックを表現するもの、理論化・

翻訳・フレーミングするもの、アイデンティティを表現するものの存在を見出すことができた (Jones, et al. 2017, p.624)。

物質という視点から宗教系大学の歴史を見直すことによって、それが「宗教系」であることの制度的意味を明らかにすることができたと言える。大学キャンパス空間が物理的に存在するがゆえの、「精神」や「理念」とは異なる宗教性に関わる側面を明らかにすることができた。

(4) 得られた成果の位置づけと今後の展望

第一に、組織の公式組織には宗教文化が根付いていることが実証された。これにより、現代日本の宗教系大学が十分に「宗教的」であることの証左を示したと同時に、宗教系大学の「宗教」について議論する際に取り得る方法論を提示した。なお、本研究では宗教文化に議論の対象を絞ってきたが、他の「文化」との関わりの存在も示唆するものであった。

第二に、このことは高等教育研究においてもその組織を議論する際に文化の要素を無視することは、分析として不十分なものになり得ることを示唆する。今日、「实际的」な主題として議論されているガバナンスやマネジメント、学校法人制度などにおいても文化が確かに関わっている。それらは「表面的」なものに過ぎないという批判があり得るが、文化特有の論理が大学という独自の組織の内部に取り込まれる際の葛藤や変容が起こっていたことが明らかとなった。すなわち、大学内で礼拝を実施することの意味と変容、物質に媒介された宗教が大学内で持つ意味とそれをめぐる葛藤が議論された。この意味で、大学の内外の関係についても再考する契機を、文化の研究は提示していると言える。

他方で、第一に、宗教文化を制度化する「運び手」についてはさらなる調査が必要である。具体的にはまず、個別の大学の歴史や、教職員および学生の経験・意識をさらに分析していく必要がある。また、個々の宗教によって宗教文化が異なるため、それが教育組織にどのように反映するかについても比較し分析する必要がある。

第二にキャンパスの意味については次のようなさらなる課題が存在する。A) 地域との関係や地域との境界 (boundaries) を含む、空間の社会的意味に関する研究の必要性である。そもそも大学キャンパスは一定の空間のなかに存在する。都市と大学の研究を参考にしながら、そこにどのような制度的プロセスがあるのかを解明する必要がある。B) 視覚性の研究である。本研究では、主に物質性に着目してきたが、視覚性に着目する別種の資料や調査を行うことによって本研究をさらに発展させていくことができるのではないかと考える。C) 物理的なものではない人工物の研究である。新型コロナウイルス感染症の流行以後、物理的でない人工物は、大学において主要なメディアとしての役割を果たしてきた。そもそもそれが本研究の視座にどのように関わるのかという点から研究を展開していく必要があるだろう。

第三に本研究では宗教文化の普及、とくに「関係のシステム」に関わる点については十分に検討することができなかった。この点について実証するためには、本研究で対象としたものとは別の、大学を超えた制度や教会との公式の関わり方や団体について分析する必要がある。

最後に、そもそも、大学や高等教育における「文化」がどのようなものであるのかについて一層の理論的な検討が必要である。学生文化や教員、職員の文化の研究は不十分なものとどまっているのではないかとと思われる。

〈引用文献〉

- 江島尚俊・三浦周・松野智章編, 2014, 『近代日本の大学と宗教』法蔵館。
古屋安雄, 1993, 『大学の神学——明日の大学をめざして』ヨルダン社。
Jones, Candace, Renate E. Meyer, Dennis Jancsary, and Markus A. Höllerer, 2017, “The Material and Visual Basis of Institutions,” Royston Greenwood, Christine Oliver, Thomas B. Lawrence, and Renate E. Meyer, eds., *The SAGE Handbook of Organizational Institutionalism*, Second Edition, Sage, pp.621-646.
國學院大學日本文化研究所編, 1993, 『宗教教育資料集』鈴木出版。
Marsden, George M., and Bradley J. Longfield, eds., 1992, *The Secularization of the Academy*, Oxford University Press。
マイヤー, ジョン・W, フランシスコ・O・ラミレス, デイヴィッド・ジョン・フランク, & エヴァン・ショーファー, 2007 = 2015, 「制度としての高等教育」(齋藤崇徳訳) パトリシア・J・ガンポート編『高等教育の社会学』伊藤彰浩・橋本鉦市・阿曾沼明裕監訳。玉川大学出版部, pp. 243-86。
宮本雅明, 1989, 『日本の大学キャンパス成立史』九州大学出版会。
Roberts. Jon H., and James Turner, 2000, *The Sacred & the Secular University*, Princeton University Press。
Scott, W. Richard, 2014, *Institutions and Organizations: Ideas, Interests, and Identities*, Fourth Edition, Sage。
四国学院大学キリスト教教育研究所編, 2005, 『大学とキリスト教教育』新教出版社。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 齋藤崇徳	4. 巻 第95巻別冊
2. 論文標題 現代日本の大学における宗教文化の基礎的データの検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 281-282
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 齋藤崇徳	4. 巻 36
2. 論文標題 戦後日本の大学における礼拝	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 年報社会学論集	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 齋藤崇徳
2. 発表標題 戦後キャンパスの社会的意味付け：宗教系大学を事例にして
3. 学会等名 日本高等教育学会第25回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 齋藤崇徳
2. 発表標題 戦後日本のキャンパスにおける礼拝
3. 学会等名 日本教育社会学会第74回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 齋藤崇徳
2. 発表標題 現代日本の大学における宗教文化の基礎的データの検討
3. 学会等名 日本宗教学会第 80 回学術大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

齋藤崇徳, 2024, 「日本の宗教系大学における宗教文化の組織への組み込みと普及に関する組織社会学的研究 研究報告書」『2021年-2024年度 科学研究費補助金若手研究 研究報告書』2024/5.

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------